俳諧 十萬發句集 夏

911.308
八
夏

俳諧十萬發句集 夏之部目録

夏之二

四月 初丁　卯月　更衣 二丁　初袷 三丁

袷　綿紱 四丁　短夜　青簾 五丁

祭　鍋祭 六丁　大矢數　灌佛

佛生會　花御堂 七丁　夏入　夏篭

夏書　幮　蚊帳 八丁　牡丹

芍藥 十丁　杜若　罌粟 十二　葵 十四

立葵　著莪　一八　麥秌

新茶 十五　茶挽草　覆盆子　残花

分類番号 911.3
図書番号 2910
巻冊番号 1/2
聖和学園短期大学図書館

若葉　若楓十七　新樹十七　下闇
葉柳　葉櫻　櫻実　卯花
花卯木十九　桐花　茨花　柚花廿
椶櫚花　藪椿　茂　松葉散廿一
常盤木落葉　橘　花橘　夏木立
枳殻花廿二　筍　蕗　蓴
初鰹　鮓　時鳥　鳲鳩廿八
行々子廿　葭切廿一　老鶯　鶯音入
通鴨　蝙蝠廿四　枝蛙　螢
蝸牛廿三　蠅　蚤　孑孑廿九
水馬　蚊　蚊遣廿六

夏之中

五月卅八　藥の日　藥玉　幟
粽　菖蒲酒卅九　競馬　梅雨
入梅　竹酔日　五月雨四十　五月闇四十二
五月晴　黒栄　夏月　帷子四十三
辻ヶ花　夏羽織　単物四十四　競駈
百艸摘　菖蒲　花菖蒲　田植四十五
早苗四十六　苗配四十七　苗取　早乙女
藻花　萍　菱花　川骨
紅花　紫陽花　百合四十八　萱花
夏菊　石菖四十九　酸漿　金銀花

合歡花　栗花　橘花 五十　柹花
杤花　椎花　青梅　瓜花
若竹　今年竹 五十一　初蟬　蟬
蟬時雨 五十二　鹿子 五十三　羽抜鳥　翡翠 五十四
免　水雞　照射 五十五　火串
鵜　鵜舟　鵜縄　青嵐
青さし　鯵 五十六
夏之下
六月 五十七　水無月　氷室　暑
土用 五十八　土用干　虫干 五十九　祇園會
鉾　不二詣　夕立　雨乞 六十
雲峰 六十一　扇　團扇 六十二　汗
汗掛　掛香　昼寐 六十三　清水
打水 六十四　風薫　竹婦人　簟
涼　納涼 六十五　氷賣 六十六　葛水 六十七
心太　一夜酒　水飯　冷麦
冷汁　水粉　梅漬　鮓
草いきれ 六十八　青田　田艸取　蓮花
澤潟 六十九　夕皃　昼皃 七十　撫子
眼皮　葎茂　八重葎　綿花
青芦　青芒　青鬼灯　麻
櫻麻　瓜　茄子　真桑瓜 七十一

宵凌　茗荷茸　紫蕣　百日紅
火取虫　毛虫　蛭蓆　蚋
川狩　沖鱠 七十三　御祓　茅輪
夏景 七十四　秋隣　夏山　夏野
夏海　夏川　夏題不知

俳諧十萬發句集　夏之部

洞海舎凉谷編
一具菴一具挍合

四月

山さとの一きはしつかなる四月哉　蕣水
寒さや四月へ移る夜の床　文里
桃さくら耕す寒し四月かな　芝榮
[illegible]心を四月の[illegible]　無宗
[illegible]四月哉　草井
[illegible]四月かな　宇鳴
[illegible]の[illegible]四月かな　紫陂　一甫

更衣

住吉の松原晴て更衣　藤和
母に向ふ待て来る向や更衣　山笑
飯米に身をのせしや更衣　芦洲
あるは鞍に重ねたり更衣　玄六
手袋を重ねて出るや更衣　了年
来る日の促して暁て又もも又　井蜒
親の家まで遅ねし脱ぎも又　祖竹
一家内袖海に降りり更衣　谷従
娘子ヤ肩そぐくや更衣　妙子
旅絹の紋付出したや更衣　松逕
衣ことして風雅の種に篇ゑ　東京　里月

卯月

芝原の嵯峨山へむく四月哉　鶯笠
立出ん小袖済くまで四月哉　大梅
芹焼に兎の出る日てありけり　貝谷
檀林の立花見すて四月哉　角上
紫香の遊色ゆすり四月哉　一具
古橋の倉すくもにある四月哉　鼎湖
日和よき中にもおほる四月かな　雁臺
羅漢寺の花美しき四月かな　蕉丘
桂木屋に葉ちる頃四月かな　涼谷
冬ぬれの衣や月の四月哉　鼎湖
鷲寄の木梢に来る卯月かな　此一子

笠ゝもする掃除有もしらも更衣　南よ女

人の来る程もの清くや更衣　越後 淋月

隣まで匂ふや更衣　布席

草の戸や衣かへてくる人もなし　雄紋

見かくる人も通りて更衣　仝

手拭とても常の絹地更衣　棋海

古き山の人も着し古衣もなし　孚石

更衣手をへらしける人の衣　霞帰

よそ衣の一人強いり更衣　松秀

人の着たる袖ゝも入れや乙鳥かな　陶桐

出かけてゝ掃除や更衣　右持

初袷

昨の裳落く座や更衣　重涛

更衣乗るとしらし紀所やな　麻く

和してまた穴ありし清く更衣　久蔵

手拭も若びたのし更衣　大梅

葉隠く二度行まゐ更衣　一陽

絹着れ古くしまり更衣　雨鶯

旅くるま二代の人や初袷　一之

湯気立つ持って出る身や初袷　古翠

隠れ家へよしみくえて初袷　史子

出代の古道具や一つ袷　桐雨

衣袷を木の其行きし袷　田翁

袷

ふるさとや家の子の手の絹や初袷　旭雲

袷着ん我よ後は草算見ん　一之

浮ゆく浮かしより乳袷かれ　夕山

笛吹きの子の袷着て居る戸口哉　月下

人並に表の出してる初の衣　菁谷

舟よせる宿の袷やかへ小袖　芦帆

住よしも絹屋へ祭袷哉　糸松　五蜆

病人の衣着てある初袷　一甫

童見の上に引ける袷一つ哉　仝

旅人の肩荷も軽き袷かな　葛之

旅人見たりしも軽き袷哉　仝

袷着る内もまだ寒き風来ん　月蜆

船頭の重ねて出る袷かな　亀女

初着て見る物入も手もとかな　丁芳

浜潮に見えて遠き出しぬ初袷　小圃

袷着て急ぐ旅路の支度哉　文斎

袷着て旅の仮寝を算へけり　越後　ぬれ水

初袷つけて山の根回る袷哉　菊女

菅笠提げて子の行く袷かな　菁谷

参詣の帰りに寄る袷一つ哉　むさ雄

松の青さを称して帰る袷哉　琢斎

初袷上野をみてる生糸哉　棣々

綿抜

わたぬきし吾妻下りの戸出かゝる　夢雨

袷着て庭あるいて居る心かな　下野 一水

新酒の海に出させる袷かな　古翠

以て来て松風にくむ袷かな　棠平

袷着て夜くちまつり夕和や語　耕雪女

綿ぬきや妻のおもきの舟に乗　椿海

わたぬきや浮世に重き丈夫　涼斎

綿ぬきや被衣濡るる袖の色　むさし 雉

わたぬきや隣秋の香の行過し　守秀

綿ぬきは松も着るねて来たり　蕉丘

短夜

短夜や柳ちる葉に花の紅　来三

短夜や虫の音ほそき出て聲　雄松

みじか夜の巻明て床の花　夕山

短夜に二三夜来たり乳貰ひ　芳谷

みじか夜を合ふ旅の舟　名村

みじか夜や舟にのせて瀬をのぼる　大山

短夜の明ていとはるゝ雲哉　玄々

みじか夜や時こそ来る旅の夢　然巣

短夜や人の出入もある諸　越後 籠翁

子を持ちて宿も短夜明けぬらむ　棠郎

みじか夜や大谷渡る二頭　千輪

短夜や舟の尽きて後櫓の音　貞雄

青簾

簾捲や出つゝ猶し竹椅子　祖巾
みしか夜や素足ある渡の舟　竹秋
青簾人待ころのくもし光武　素樸
置く家も精進ふかり青簾　かき雄
浴衣くゝる浮子は小声し青簾　月晄
梧の葉の雨まち月に浴くや青簾　松宋
涼しく向けて鶴の青簾　孫武
背嚢の如く物床し青簾　布席
庭の松花の散るを青簾　松月
三味線弾けも青すだれ　一具
松枝を布し越す青簾　八雲女

祭

萩萩も持よき姫の祭笠　き山
山伏の夜なし夜宮や祭笠　南よ女
粽をくけて来や祭の一人客　葉径

大矢數

大矢數あつるや清代の秀歌　素心
奉くるも稀なる鶴哉　南よ女

神楽

灌仏

灌仏や何もあきしちの釈迦　道雄
灌仏や二人連ての生取の焼　田菓
灌仏や人の見くるかくれ子の　南よ女
灌仏やあふつ香る葉茶壺　東北
灌仏の日のしぶけや蘸上り　祖巾
灌仏や香水吸ふ蜂も老ふかし　雉周

佛生會

灌仏に紛れ出ける白字哉　惟州

灌仏や田舎も出る傀儡師　序岷

灌仏や蛍ふ雨しかる菊の苗　涼谷

灌仏や傍花の花の白牽牛　兮

灌仏や菜の畑を相中る　蚕浦

山里ては花いる日の仏生会　柳英

聡ちに隔絶重ん仏生会　菊谷

としの暮の年に出る仏生会　艾月

兄弟子と争ふ茶やし仏生会　雪馬

弟子の座て憐れや仏生会　玄之

小草まで花の陰あり仏生会　蛍く

花御堂

万代の雨降く仏生会　雨芳

怜悧の生いる仏の蜂蜜哉　石村

子を連て寺の出乃仏生会　一水

山里のうはさに何れ仏生会　以吉

桂にも風も明るく来たる仏生会　涼谷

荒らく角な散し拝仏生会　芳帆

山なき動く草もなし花御堂　甫仏

出る日にて小山桃や花御堂　梼海

抱て子手の志もし花御堂　四箒

見よりて連に何らしや花御堂　雨女

床まで見る人あり花の頃　不流

夏入

夏籠

松風や夏に入人の心の世　有水

一ふしや我夏籠り狩人の時　然楽

夏書

松の位尽日夏籠りの内　蕉丘

下駄の音もしてなほ夏書哉　甫門

夜出ともや机の下紙燈一つ　一具

幮

山の月も人に幮を屋の苞　東井

明月や山風寄て幮　素芯

世上の風にゆれん幮の中　二丘

針の子の肩息や幮の花哉　古秋

帆の幮の幮の中　西女

あの月の松をへつて幮の夜　如庵

蚊幰

松風猶ありて月の光んの宿　蕉渓

世をすねて月さへ幮子　九操

出る人や一隈ゆ住む菴の幮　杜年

おもひきて夜幮の月戻る　荷堂

一夜猶て尽ても月を夏籠　和き雄

初の空の来ぬまや足さくり　大呂

その月を鈍なる泊や幮　模海

幮に来て暦もつきて柱の幮　夕山

旅の人寝せて蚊の幮の月　易年

扇子の入てありぬ笛幮　菜静

後の月て残る松幮　座面

牡丹

手はつけても四角に飾らし牡丹かな　多よ女

株ふりの海をへだてる牡丹かな　一之

山吹に枝葉すかして咲にける　山笑

ちるにさへ先のしのぶる牡丹かな　甫山

牡丹さくや先善なき露の紙　常陸 亨秀

咲もせぬ医者の尋る牡丹かな　二丘

手丈夫に咲くや牡丹の花の備へ　道雄

笈提の主まちに動く牡丹かな　玄々

牡丹とて床賑はへる蕃も牡丹かな　仝

嵯峨の奥ふかく跡なき牡丹かな　鶯笠

唐めかし料理も来し咲牡丹　香蒲

葉とふりて座敷稀や名牡丹　亭山

一日に花の崩るるぼたんかな　米延

人立ちて集ひて眺めり牡丹かな　来木

葉の栄に寄せて崩るる牡丹かな　古峰

きらくと輝く来るぼたんかな　田兼

蘇鉄廻りて咲き牡丹かな　月呪

帽堂の風の吹くぼたんかな　多よ女

出雲に蕗なしめる牡丹かな　蕾秋

京様に小庭にかかへて牡丹かな　丁亭

素風これの側へるぼたんかな　一皇

新家の男庭をつくる牡丹かな　庚年

白紙あるほたん一輪風もなし　妙子
人の手も借らて咲る牡丹かな　寸府
清水川に移る牡丹しられ　文流
寒葉も木るも居てほたん哉　さよ女
穂首く絵仕出するほたん哉　芳谷
心よくほたん蔵之白ふなりけり　菁乙
わか庭の花の兄さしほたん哉　左挙
扇持つ数も知りなほたん哉　樹塘
遠祀ま育ひ人に切られほたん哉　菖松
月影の移る戸口や八重ほたん　葉雨
山風の吹くや牡丹の花の露　千松

まけるなよ牡丹の隣の梁　玄く
元日に見しか此ほたん哉　松秀
松風も吹の来るほたん哉　不符
牽牛に入かかりたるほたん哉　吟露
毎日のたえてなき咲る牡丹哉　湊谷
高上にて咲る人士のほたん哉　夕山
寒葉を胸近く居るほたん哉　よし亀
切倒に持人の居る牡丹かな　亭鳥
蝴蝶の出かけて這入ほたん哉　五岷
挑灯て照らしたる牡丹哉　何年
此家の名をい立てもほたん哉　清泉

芍藥
杜若

地はかりの名を戴し佐かん哉　栢樹
恙なく咲てをる芍藥かな　荷了
香りは咲て牡丹畑や大世界　蓼面
芍藥や掛けりを脈と俳諧　薪水
芍藥やきへまて惰ずん人居る　道雄
手毎きね芍藥畑やちまの旅　乙よ女
橋ひとつ越せんちりや杜若　一齋
二人して舞ふ一本や杜若　仝
杜若一株にて這入やち家中　蔭和
紫の山も面なりまへのちま　柳笑
迄波ふ布よふ衣河り杜若　嘉自

菖蒲ぞ若侍や杜若　五岷
剃れの借りてのや杜若　芦帆
車屋のとなりにのけり杜若　芦月
杜若浮や家鴨の浮てたる　文傑
白ふりて手掛うやかりのたて　渓好
手を結て袂ねしね杜若　乙梅女
二ころたる手に移やきま浮まて　友之
助太刀をはやあもうへて杜若　和雄
座中へ岩藤に杜若　一陽
杜若咲て口をし名おもし字　玄々
かつらるる年て宮の棒読ひ　松惣

子供よりさきに見る杜若　羽前 秀楮
学底にありけね庭や杜若　蚕浦
人に津のくまで出けれ杜若　素芯
杜若豆腐も流るる海風式　大梅
挽さる秋の光やうまつりき　古成
的実色を書き中之杜若　井延
一本さへ梅の中なる紙のまま　為よ女
一葉ら継し雨見や杜若　丁杏
粉の彼方ならで見つまま　一具
犬付く星一ツ隠るる杜若　一梅
末若手幹くれよ雨見や杜若　雛周

花の中に咲るのみてなりまで　秀鼎
むらく起に月代利ね杜若　文翁
梨の木の露からるや紙のまま　為よ女
貸傘に舞の居なり杜若　芳谷
降なる程の脇に見し杜若　竹寫
待ら扉て咲くややる杜若　葉月
引ぬいて見る寄し杜若　粗年
船の窓に一宿こりや杜若　雄嶺
石原をうりてなく花八杜若　志の女
搔るみの先へ影くやぬかまま　石将
芳戸川やる擲を投ふ杜若　篠山

けしちるや[illegible]もかくれ[illegible]　雄嶺
影[illegible]よく[illegible]のけし　一雅
[illegible]けしの盛を種　亦序
散物と見て[illegible]けしの[illegible]　古表
ちりそむ[illegible]んけしの花　巣平
[illegible]の[illegible]やけしの花　陶烟
[illegible]の[illegible]物忌する[illegible]心　有水
牡丹[illegible]けしの花　星山
散りて[illegible]けしの花　花甲
[illegible]けしの[illegible]　笑語
けし畑[illegible]の[illegible]　点巣

葵
立葵
著莪
一八
麥秋

[illegible]の[illegible]けしの[illegible]　常陸 次峰
[illegible]の[illegible]　涼谷
[illegible]の花[illegible]　一月
[illegible]の[illegible]　示寓
[illegible]の[illegible]　不竜
[illegible]の[illegible]立葵　一具
[illegible]の[illegible]　雄嶺
一八や[illegible]の古[illegible]人の[illegible]　人蔵
[illegible]麦[illegible]　点巣
[illegible]麦の[illegible]　葉月
[illegible]小里[illegible]　稲所

佛師に折敷てほすやわかきかな　羽倹　一甫

笠の上に挟まれ出しるわかきかな　一巷

見え隠れ流の葉末の光りかな　玄く

堀川の繕ひ舟にわかきかな　四筆

返し手に葉末白めや芝青む　久藏

見えかくし下に並ぶ葉や山　下總　幼芝

右左象もわかるの武士鵠　古戌

下井に入りの積る葉末かな　菁孫

一株に分ちてわかきかな　吉陸

文箱の傳へて届くわかきかな　東京　風光

盆の揃ひ葉に出すつく葉末かな　壽堂

汐あかく家の網やわかきかな　棣く

流れよりすく積みて葉末かな　夢白

蓮の上に見えし葉末かな　松野

見わたし根の葉もねわかきかな　万里

根くれの積り積る葉末かな　永昇

清新あり乃下け髪容わかきかな　清風

神の向に川のよけるわかきかな　古橋

うかみくと隋處や葉末かな　古翠

病人の摺る筆に折るわかきかな　凉谷

畫人も手に動く筆の葉末かな　以雄

岸のわかき木毎に芽子柳かな　茅丸

若楓

神垣に様の往来や若葉楓　一髪

旅人の菓子茶も出んわかかえて　蕗々

鮎市に鞠場の隠る若かえて　子軌

広庭の木かきも涼よ染わかかえて　垂浦

峰の遍る辞路の径や若葉楓　篠山

生えかくし山家よ五の若葉かえて　二丘

隣みえて風の来之若楓　楳海

歴の笋とるあたりわかかえて　了是

山中やたり別て捨よし若楓　雛周

名蔦ちるも秋子勤やわか楓　角よ女

人先子同命しやくも若楓　凉谷

新樹

あり余まくてちよ料理や若楓　石符

清水体只今ほとし新樹かな　芝葉

木下闇

下闇や塀のわくる井戸の端　古擧

古池て襟きの捨つ木下闇　埔菓

志ゝの人に二葉出合ふ木下闇　志乃女

葉柳

若柳の家と来や遠りに　太栰

先しくらして若葉柳哉　月晄

葉櫻

葉たつらと垂る浪墨田川　菊乃女

紫桜や子鵜上りの大樹係　一具

木作ても二目隣き雨けち　如二雄

木桜や鮭日暮て花の人まつ　貞笑

櫻実
卯花

葉になりて尋ねしくる人もなし　松秀
まさかりや築地にはよ弦の音　篠山
葉桜や星もみえても夕かな　笑語
葉になりてや豊かに咲きはなるゝ　祐化
葉桜や雨に隠れし作り道　葛松
葉になりて掃除のなる人もなし　文呂
散りはてゝ赤くなりける山家かな　妹臺
若安き咲て行しを桜の実　若径
卯の花の一重帯や軒並ぶ　蘇水
卯の花や雪ふりつくの六日月　竹丸
白花も照りさま又夜ふり　石竜

卯の花に暗くなる夜の梅も　芦帆
卯の花や行燈を消して来る夜　宗魯
卯の花に来て見る垣の手燭かな　乱雉
水際の卯の花咲くね山陰　正令
白妙の雪も残るや魚の来る　幼芝
畑道の卯の花咲て見えにけり　古珉
卯の花やつゝの中なる雀哉　丁知
卯の花や雪も残りて鐵株　菁花
卯の垣や月夜て白と夜かり　巣平
卯の花咲くる枝の小雨かな　柏樹
卯の花や下るしまの　里竹

桐の葉よあらしはや来月夜哉　栗笑
桐の葉や夕暮ぬ里も招く手　如仙
ちる花や雨にさそはく蝉の聲　吉機
住居よき庵や桐の首夜の月　龍化
桐の花に美人袖して結ひ哉　嵩山
ちる花や閑見しよる不二の山　涼谷
桐の葉や盥の入境の柚ゆけ　仝
桐の花や涼しさ此の窓を樽　竹岫
其の葉の咲や庵の外ふかり　鷺宗
桐の花を蹴まてやうまん涼　氷谷
桐の花に葉の影も持ぬしぬ　篠風

桐花

花卉木

桐の花も急なるは楼ぬ御座哉　其楼
桐の花にたゞ探すての忍き宅　久蔵
ちる花や畑の出来し桃かゝり　幼芝
其の花や涼しさてもたゞ一体　一蕙
桐の花の咲きし橋る庵哉　松懋
立ちぬる戸尻明らし花桐木　梧樹
松風の吹きに暗き哉桐の木　文里
家に身にきむ緑も桐の木　竹柔
一般の帳に雨さし桐の木　大模
人来の揃へたる暮に花桐木　松雨
手におろる焼葉の上や桐の花　芝葉

菸花

南海の風に多し烟の花　由之女
郭公の旅宿ありし烟の花　秋之可
烟の花納屋の新鋪に乾されけり　涼谷
牛蒡の實姿へ集や烟の花　一具
嫁に似て累もけるや烟の花　庚午
町廃や右の烟のきれの花　一甫
澤山に葉を残し刈てぶりの花　貝谷
妹とおなし達て烟の花　月倪
夕孔中乾かぬ石や菸の花　若狭　羊侶
田へ見え四つて垂や菸の花　一具
山伏の泊りけり瀑て菸の花　桂丸

柚花

夕香あり大方庵し菸の花　石荷
上の樹へ隣りし柚の花の宿　椿海
柚の花所の柚も人に尋ね見　雨巷
柚の花に校の花より挽女哉　應雨
柚の花や連歌ある古社　松秀
雨の夜に石原行く宿備　淡峰

棕櫚花

後に文殊く棕櫚の木にも似たり　布席
茶の花や小家に葉を花の雲　雲妹

藪椿

郭公ちらちらの乱や藪椿　雄槇
親子して月代剃や中の椿　葎母

茂

宿持荷の古く踏み草茂り哉　北琴

一本の枯木見ゆるに庭も暮りけり　芦月
飛打の音耳に立ちにし暮れ　涼谷
格子も餅も雨にしたゝみ暮れ　若青
残て来し松の下にも暮れ　二晶
鉢を安らぬ里安山の暮れ　菊く
後姥の後埒も立ちにかな　ぬ乃
雑屋の道の立ちぬる暮れ　子梅
月落ちて菊の根に暮れ　素志
手すさびに行末も落ち山路かな　雅枝
海の海より寄るたちけり　禾木
志んしんと来人なき暮れ　芦々

松葉散

今朝見えて渡りの鳥も散りけり　角ノ女
峠よりみえて村へ出る志るしかな　庚年
手に青き志ての水の手に散りけり　桐雨
舟出して又人の出る志るしかな　江三
けさ見よと来る日ばかり籬の松葉散　不流
陸前
一本の庭松葉散る紫積む　一蕙
月の松に憎き出たる手や散る松も　素雪
海の床にそよぐる松葉かな　雨什
松葉に散れる手の取りし旅の空　赤摩
松を散りや下野の煙たちけり　如蓮

常盤木落葉
常に無き木に唯ひ留まる落葉かな　文淵

橋
花摇
夏木立

樵やふりむいて来る夏木立　萩水
正直に白く咲くや夏木立　秋覚
鴨の声抜出て流るる夏木立　恵本
雲切れて出る山川の夏木立　薪水
家遠く見て森ありの夏木立　葉月
里人の出て見る月や夏木立　凍谷
五六人旅人通る夏木立　芭角
住山の夏ともみえず夏木立　陶调
へんへん鳴ク鳥の夏木立　踏草
世の中や松も夏木立　素有
大粒な雨もゆくて夏木立　乙甚

枳殻花
筆

小山の夏木立や夏木立　花亭
むかしの家枳殻花　布席
筆を折る身に枳殻　雲水
竹の子や掃よせて麦の穂　芦州
竹の子も若葉や羽黒山　秋さ雅
筆とりて旅寝　雨蛙
秋の日に筆取り　田草
温泉や筆持つの鞍　久蔵
竹の子や覚えし麦の中　一具
今の筆出ぬ井戸の　小圃
筆を持つ　一樸

夏

菭蕈
初鰹

大名の行の子打や川向ひ　東京 蒭山
筆の枝ろ子稱る夕まの形　山雄
この比の筆真ふて夜りを　野翠
咲のもとく出る形き樓や駐一把　宗桂
ち所や二人来り葬まき　如さ雅
世の行冷の茶より早し初鰹　桂芽女
まけぬ氣に貴人實人や初鰹　大棲
志遠のまはゆかし　まん松魚　月晄
初松魚とも出たる子　貴ひ　多り　一楼
一休　乳し刀　携さや　初松魚　高よ女
初名　作ち人　来らて　持ち　雪　耕雪女

松魚

煖物子すへ汁半はし初松魚　甫く
ちとりて二百まさ公きんの鰹　兩夕
鰹タタ打の庇けるゝ庵り形　云く
てしの大塚打出松魚八　木樗
手まみ飛かく賣る持か鰹今　鶯笠
几迄山まへ小家ま入ぬ松魚賣　素忠
聲篠子出て八賣く鰹タタ　芳居
風の人すく無かし松魚かな　蕪毋
むら雨さ出てまへの後や鰹賣　次蕣
今暁し松魚ちて上よ行下　尚古
とし寄へ八松合ぬ鰹ちて　若仮 一甫

郭公

庖丁も碪の屁も月夜かな　垂休

青雲や露一聲ほとゝぎす　一之

鍬音や暮て歸る時鳥　嶙洋

手のかしは築山かゝり杜宇　一翁

家に来て声も高鳴く時鳥　夕山

子規ともしも聞ず告篇　素有

ほとゝぎす鳴や蜘ふるし芋の畳　秋美

一聲して舟に乗せたる時鳥　木司

深くきく一聲濡し秋の雲　雨々女

時鳥月と落との間より　舊守

風呂の中の音も絶えぬほとゝぎす　若月

ほとゝぎす枕刀を抱いて寝ね　友之

十五夜も聞いて一声ほとゝぎす　斗玉

鳴るは秋や更て寂く時鳥　宇鳥

蓋ね居や戸に寄る夜ほとゝぎす　涼蘭

啼耳や寄る旅寐に我縁　むさし雄

鳴別て時鳥なく聞ゆや音魂　五岷

子規きくも蹴る舟擲ち　道雉

湖の秋見て来しゆ時鳥　公

杜宇鳴や嶺の淡月し　一毛

雨に花露にぬれや時鳥　文鷹

藤川や渡りて渡る子規　一陽

暁の簾(?)闇はなれし杜宇　文和

ほとゝきす五月(?)雨(?)にせまる月夜哉(?)　一枝

子規田毎の影や新き橋しける(?)　玄々

浮(?)く雲(?)ほとゝきすかくれて時鳥[…]山　四峯(?)

東より山ほとゝきす西の月　素芯(?)

橋の名のちりも静なれや[…]　竹𡵅(?)

杜宇啼て鳥山を越し飛(?)　鷲宗(?)

急なりし二声の宿やほとゝきす　古硯(?)

ほとゝきす何(?)の夫の舟の寸遠ひ　大梅

時鳥晴かゝり加茂の川[…]　應々(?)

時鳥[…]山哉(?)　椿海

ほとゝきす又[…]の声(?)　生(?)宗

杜宇出[…]夏(?)陣の声　民(?)植

一寸出て[…]時鳥　三平(?)

時鳥暮のまけ後を出し飛(?)　鬼々

沖(?)[…]ほとゝきす　雲山

実(?)[…]紙帳(?)[…]　羽前 李(?)暁(?)

何處(?)[…]の利[…]　只是(?)

子規[…]すまし　周愁(?)

葉も葉も荒て[…]時鳥　祖印(?)

杜宇[…]面白し　松秀

蜀魂[…]不二の山　南(?)安

蕣や六尺の寮門や時鳥　　多よ女

樵りし事も篝や杜宇　　一具

飯櫃の中も古びぬや衣がへ　　小園

事くさを先涼しさや涼しさは　　一桜

酒盃の杉能屋も乙女かな　　寅濤

子規啼くる闇の樗一つ飛　　玄る紀

静かな下部の浴衣を初庭子　　濱窓

深し堺の山吹声や杜宇　　如子

一菰に秋もつまる竜時鳥　　扇花

老僧の背中打せて蚊魂　　黙巣

思ひ出もあとの光や蝉静か　　八寉

数々ら行慈水も雲の峰香　　鷺湖

不仰も芳の月夕飯もとや子規　　子格

世は連て先へとしと杜宇　　文繍

よんへもとおかしくなとしぶん　　キ山

人の欲まうさと毎々あふ梅　　多よ女

時鳥何や蓮田は雪毎く　　松什

家橋の戸にゆるや杜宇　　黄谷

涼しさや菊の吉ひるる　　虹久守

雲青く初音かけや子規　　大當

有しさや何の桜かれ　　蚕浦

家の牡丹　　位丈

菜種まて世に手を出す薄過て時鳥　荷乙

雷鳴も借の中の声なき不如帰　嵩翠

時鳥の聲のまね居るかし時鳥　雨秀

新緑や初音きかぬ杜宇　古挙

宮嶋やうき浪に来ぬ子規　仝

子規宵ほど兼ねたる声　奇了

足弱の猿利を得たり時鳥　甫く

笠きるを見ぬ者なり深山かな　一髪

夜は冬の杜宇近し　准美

杜宇一人がりし業の宿近し　城汲 嵩菁

時鳥の声をする不如帰　布席

時鳥まつもりや山ほとゝぎす　阿分

手を折て待つる時鳥　時々子

十日より暮も月夜子規　雄嶺

暮の声のくもりて時鳥　素左

恨よけの古手をもちて杜鵑　二丘

杜宇時の声の夜の後より　棣々

夜へゆかん時雨不如帰　二晶

濱人の秋の上や時鳥　霰翠

蜀魂二夜月見て松の風涼し　葵面

先ぬるも声も替れ杜宇　布席

月と夜ありし雛てほとゝぎす　和琴

鳴よりも飛を急ぐや時鳥　耕雪

明神を西に東にほとゝぎす　不曲

うきも温泉の湯目ふや杜宇　星山

寄禅の所り求てほとゝぎす　高山

静に待ぬ枝の出て鳴子規　古翠

千早振神の何処や留魂　蕉古

寐ぬ夜ゝの寄り添や時鳥　乙貞

陸奥

あら汁の二根練ぬや子規　木架

ほとゝぎす鳴や社の上り口　扇花

梅急き夏のよしゝて時鳥　乙綱

明星の桝子蔵るや不如帰　月睨

茶の木の梢見れ時鳥　仝

杜宇来て啼毎も鶯の杯　松秀

荷末の雨に雨ぬ青葉用植　仝

麻に託て時鳥鳴山手哉　康宕

静に月夜すけて或所哉　麻丘

此路の川まで降や声ぞおもひ　七名女

芳よりさる強くも杜宇　秋螢

三夜の禅傘に流して時鳥　蔵和

峯辻の月も立迎や時鳥　以交

深山々木々も深きや子規　棠郷

窓に物書きて寐ませ杜宇　為よ女

鳴鳩

寺の鐘も出ぬ雲之時鳥　雑用
今きえ耳に残りし子規　丸充
耳をたて天さや啼ん時鳥　如名
夜雲の露きぬ朝や杜宇　道雄
呂宋人わも乃はせとあめ降　南よ女
啼て出ぬと聞れても人まれし　一具
夜枕月息も忘れる時鳥　涼谷
植木ゆけ姥家様名や子規　仝
山二つ越えも知らし時鳥　峽洋
時鳥何處も鳴のあとの迹　素有
待ち饒光も夢し時鳥　思文

寝るまで辻行燈や鳴聴　芽谷
時鳥きこえて三里行ても鳴　芭角
休みや早く出ても鳴時鳥　武琳
楼子葉を脱て出る之鳴の声　不点
古人のきまま寝山やかんて鳴　梅雪
雲の外の消ても鳴や鳴聴　一拙
六七日たち戸の外へ来て時鳥　素芯
何心なく啼初てんとて鳴　寛斎
見積る葉畠之一のんとて鳴　祖帆
麻子吻る山を向之時鳥　乙貞
寝他の一味と聞て時鳥　南よ女

行〻子

夕暮や先ゆかしく鳴鵆　友木
寄ぬ子のちらく里や見えなる　雨夕
二つ三つ持ちて鳴ゆ宗雪　五竹
後先子人数も知らしかなる　陸奥 停々
舟の出ぬ間をまさて出る行々子　秋螢
一とろく又陸も上し行々子　芦帆
立くよ来て繁く行々子　一陽
萩くく子ちかけて弁さと秋出し　よし秀
一詞然一言独法し昇て行々子　雄嶺
出て成口なく持くきかしくし　亦木
行々子物ふ時も来たりとふし　芝所美

葭切

鶯音入

老鶯

行々子鳴きる出し羽有れ　素之
近くこち切との何も行々子　万里
気色の大の行く気色行々子　不曲
けしきなくすくなり行々子　星谷
葭切や舟松繋る停く所　松秀
よし切やいつ脈るるも水の声　桂 蒼女
鶯を入し鴬のおりる厳かれ　素恋
衰てし後鶯梅をいく廻り　三平
鶯や一條朝て老をる鴨　貝谷
鶯の老着たしの椎の木　白起
鶯や老ての我も一篁　椿海

通し鴨

蝙蝠

枝蛙

螢

光りの流しゐる白彩通ひ鴨　文鬼

蝙蝠や作の房ハちまのある　芳谷

蝙蝠の教ゑりたりありけり　芦月

蝙蝠や比恋柳の宮をさる　ゐよ女

今ゆけハ流てもや枝蛙　雄嶺

枝蛙鳴くや籠の魚を見し　文和

枝蛙雨よと知らし風の奈　キ山

露にゆき打む心気枝蛙　雁堂

梢より手にすむ草に螢哉　一之

橋の露かけ流るかくるかな　荷和

放しける又飛にける螢かな　石上

揉多町へ行ても追込螢かな　芦月

夜明を隠れありける一ツかな　未公

草津から拾て大きな螢哉　斗玉

螢見て来るありける光かな　五晃

隅田川舟で丑三螢かな　道雄

夜りく娘し投出て凄き螢かな　不着

草の戸や拾ひる螢手来ありける　尚古

雲の空盛をぬけける隈かな　葉中

物見出来る穴さ迷ふ螢かな　素芯

螢狩つ橋投手会なる所かな　節々

人茂く分けぬ前も待螢かな　梼海

山伏の来てふく世話や蛍かな　民枝

面の形の揺にすゝる蛍かな　三平

森閑の湯漕に移る蛍かな　桂程

つ留の閨窠櫛にかくる蛍かな　米味

裡に入れて三つ四つ出る蛍かな　古翠

羽織の袂に照りて蛍かな　大貴

尾道の女寝に出て蛍かな　寸花

待ちかくと森陰に光る蛍かな　照菜

一筋もこひ橋に来かゝる　全

養子待ちて廻り入る蛍かな　待も

何事も主客の上文蛍かな　双二

羽前

麻につゝもかゝるの光哉　稲香

上り舟に蛍追ひてぞ去るよる　荷乙

家にかゝるくゝ籬の庵　松菜

破籠書きすゝ集まりし蛍かな　梅鳩

夜も出て家に親しき蛍かな　煮古

陸奥

僧の紙に包みしほたるかな　南山

蛍かな二つ家松横に面影かな　貞雄

人列て繕ふ上かぬ蛍かな　方里

上下の面影に出た蛍かな　有水

面十粒かゝりかゝる萩　篠山

大面に紙で町と云蛍かな　古翠

夏

蝸牛

植らるゝ田の緑まさる蛍かな　月晄

玉川の流に涼しさまさる蛍　初雉

伊勢の風も穂切るゝ夜かな　康宕

東寺にて秋来る夜の蛍かな　意の女

蛍の峯紛れもや男児　杜月

見ぬ夜ことに這る夜や蛍　葉静

田苗より這入しなかるゝ　松秀

香の色暗きて蛍の集り哉　宇水

影ふくはしき影の蛍哉　梅雪

蛍来て壱くうなるあり哉　亨寿

影の住家ふさなるや蝸牛　四明

雨多や蒜挂也ふら野のみつ　芦月

此と見ゆる間もなき蝸牛　甫篤

蝸牛色つけつけ庭の垣見　素悠

闇伽や摘蕗色蝸牛　萬之

世住ならぬ手ゆ花もるる蝸牛　三平

何処へと行ふ方に蹲や蝸牛　松秀

蝸牛柳より角ハあるまじき　名村

角まかぬ菜の花ち垣蝸牛　蕉松

いつも妙柳なる気もき蝸牛　為よ女

其の氣の言ゝにも津はへ蝸牛　霞擧

娘奥の所飯にとゝまるや蝸牛　松秀

蝿

蚕

木をゆする中にも家や蝿なり　東京　石村

角力する日の見えておや蝿なり　旅山

うつりきと蝿る梅花や蝿なり　月晄

蝿を追ふ手にかゝりたる仏哉　素芯

草刈の出て来たや蝿の声　倚海

蝿よけの茶盆にしるき蝿哉　乙女

人並に蝿の絲かな蝿の人　二十園

蚕二一ッ兼ねて蚕のなり　蕃雄

龍をくみて蚕かな　下総　友之

蕭物も夏は蚕の中なり　一甫

用のなき蚕の成る夏の哉　茶耕

孑孑

水馬

蚊

溝川の中にもゆれや蚕の中　手軽

鬼角する日の中や蚕の中　越後　里月

蚕とかや小さき蚕の蚕の中　斗圃

夏ぬれて雨まて蚕の蚕の中　斎采

先をゆく蚕の中の梅の花　永翠

孑孑や構てある山中も　翠巣

雨上りや孑孑流るる清水哉　全

水の中を流れよとそ手まし　古陸

水とも見え水の中も付柱哉　宗秀

梅の花や妻持ちの身も哉　梯花

流舟の如く上り見えし蚊哉　幻芝

明る夜も又蚊の声の一ッ哉　自晄
蚊に起て声たてる女房哉　角上女
雨の中蚊の出ぬ内と稼ぐ哉　一具
蚊の入て来て障子宗鑑の宗　楳海
かくまいて蚊の川越る雨夜哉　史子
蚊の多く寝て又夢る明ぼの哉　蜀山
夏の蚊の手の届く迄遊びけり　廣連
蚊の中へ持出し煙の走る哉　角上女
酒飲ぬ夜や蚊の声や豆腐哉　芳谷
春の色晩まで閉く入蚊を哉　索索
夏の蚊の一ッで旅を見ゆ哉　仝

蚊遣

川風や内懐を蚊の出る　二晶
蚊の声も風なき夜まで松の月　英二
蚊の中や蒔かしき柳子　有水
夏の蚊よ起て居るも灯る手哉　菰巣
まくらや茅子夏の一吹の便り　陶烟
蚊の除を人の言たる行や汁の奥　八朶
川ばたの夜寒の栗蚊子喰哉　沼蓋
蚊をたゝいて障の紙と宿轉する　麻交
蚊も来や四中の家よ家の燈る　石上
二ッ似くも嘆ともある蚊見哉　田蕭
風よく寝て程よき蚊見哉　下総　一甫

耿立子のもぬけを見てほたる哉　嵩笠

水影の中くゞるやうなほたる哉　素志

沖の上や星のほたるの明る程　田翠

下戸ありて蹴て舟のほたる哉　雲山

ほたる見や闇の通ひ来や不儀　祖卜

くれ見つゝ暗き里へ出るほたる哉　白燕

捨る日用ありて家のほたる哉　杜貫

家陰の絶えて出るほたる哉　左□女

手尾中中宿りてほたるかな　万里

主夢前側へ流れ出るほたる哉　乙貞

声人手をうつを捨りてほたる哉　葎母

棲して秋谷ぶる出るほたる哉　杏橘

ほたるから橋へ落るや松の露　鷺山

川ありてほたる拾出る麻机哉　保谷

見舟にも寸の身の上をほたる哉　石銑

来る人を考えて見てほたる哉　存女

とし寄の座りて世話めくほたる哉　二丘

棲ほたる田ふる露に輝る宿　古耶

暮の家も持へておるほたる哉　一秀

藪松も明るくかくしほたる哉　川英

ほたる見やまた出るとあるまへ哉　芳谷

ほたるふるへ文里算ふる宵の程　麻奕

夏之部中

五月

水足の増て淀香五月雨　東京　夕山

尾上まて奔中の音や五月雨　楚浮

浮山水の樵子も渡し五月雨　鶯笠

山松の雲とゝ神も五月雨　湘月

薬日

葉ならや若乳飛込草の中　雉堂

薬玉

葉玉を戴くのるや我ゝ奈　棠郊

幟

吹きて鷲や幟の杉　芦帆

粟柿と軒の功まれや紙幟　杏斌

粽

松風に折らるゝの竹の粽かな　素秀

里はりを梅に見たほ幟哉　淮美

風纔かに吹けるも風寄るの竹の粽　鳥足

幾らの粽さえも幟かれ　吟震

松風に向の中よりし粽かな　一之

屋根まで及ぶる蔦え見ゆ幟哉　石梢

結ふ金糸なる寄く結ふ粽　柔木

魚て作る度の結び笹え結ぶ　木司

夏日する子の質みちまきかな　玄子

手早く結て友の寄るしちまき哉　自晄

出来粽ふ取りよ手剥る粽哉　四明

菖蒲酒

競馬

料理師へ粽出してもらひちまき哉　むさ雄

かうしさに子の飾りやちる粽　布席

解よりは結ぶに安きちまき哉　半山

人生の急ぐ出来ぬ粽かれ　雛田

むかしにも結ぶなるちまき哉　性之

秋ん形より結ふと取ふちまき　素志

菖蒲る粽も含む菖蒲酒哉　田華

菖蒲湯下にも上にも[illegible]　横浜

競馬子供治め直ら揚る[illegible]　芝葉

むか菖蒲は下の幟まかへる　夢之

兄弟と出け合の渡し競馬　角よ女

梅雨

鶏の聲さへ替るも梅雨曇し　蒼和
梅雨入や植木を下る金魚鉢　松秀
梅雨晴や草に露まく草の宿　田扇
移りかふ出来ぬ事をし入梅の空　秋聲
入梅見る家の戸へも蟇の花　兎々
入梅晴や月落ちて止む雨の脚　月帆
入梅や人まつりまう小寺のおく　蕉立

竹植日

今植しやまたにさへ見ゆ竹の雨　古情
竹植て竹より見ゆる清印哉　高安
竹植て見ん人あらる庵哉　菅児
竹植る二人か中ぞ月夜かな　桃鳩

五月雨

五月雨の露なきふしや庵の内　大梅
五月雨や上り場所見る四つ戸口　庶々
五月雨をかへて戸も添ふ藤の杣　一之
五月雨や夕べの庭へ通ひ路　思文
はら／＼梅や草の中なる蔭の花　芳谷
五月雨や扨も蜘もうすし庵の雲　吉峰
五月雨や柳の月ぞ大晦　素有
五月雨や荒草さへ不細の中　下総　一甫
入相の鐘も沈むや五月雨　梅雪
うれし嘆よ浮世を見し五月雨　田篝
五月雨とおもふも移ろ雨夜哉　桂海

新家町や本下も道ふ五月雨　久蔵
見て居ハ汐満来や五月雨　古拙
五月雨や桶縄しる蛇変　回茅
孫蛇も不動なるや五月雨　一息
人はみんなく枕て五月雨　史子
移り居る縄とて皐月雨　英山
押上る五月雨雲や大耕地　路菜
五月雨や音見えて来和哥の浦　雛周
五声あるも鯉の本待五月雨　星月
五月雨や夜庭の鯉子嵐あ　四明
此ゝ猫やゝ絲々擣ある鐘の邑　香浦

降音の止む所は家ハ五月雨　壽泉
片寄て萩も伸る五月雨　和琴
五月雨や松露泊て明日の鍵　松月
物の家も萬葉撰稀子五月雨　甫摩
降る稀五月の所玉子満一杯　棣々
洗濯も洗ひ物や五月雨　京の女
縦ゝ舟く流れ松や五月雨　須尭
五月雨や笠ゝ濡手八百七つ　不曲
五月雨やゆく奴般も性牛　陶烟
哀ゝ哀く掛尾明之五月雨　石符
墓所の下降る兎乳ゝ五月雨　篠流

紅花の末にも五月雨の名残　十菊
五月雨や楠集まる嵐の菜　吟霞
右へとくに居ぬれば五月雨　月晄
食堂にゆかる社や五月雨　仝
瑞ある法縁の物や五月雨　涼谷
明けがけて背丈あとに五月雨　棣々
五月雨の暑気付けり峰に山　秋和
五月雨子孫の焼のに一つより　可底人
奥の背に暮る壁の青や五月雨　稲香
榎の先に手とる五月雨　麻交
五月雨や蟹の這ひ出る榎の下　芦月

五月闇
五月晴
黒榮
夏月

桐の香や青みて篭は五月闇　久蔵
負けし夕まで垣根や五月晴　周然
白鷺の出るやうや五月晴　岐久雪
赤陽伐を出けて庭や五月晴　杜年
昇ゆる人あり信や五月晴　雨芳
足までや夏のかげまと　思文
夜の月入るやまだまだ山家　夕山
光去帰り出る数も夜の月　黒文
虫出して居ぬ家の夜の月　芦帆
不山中庵持たしも夜の月　文傑
居更尽く松をとまで夜の月　蛍好

應千拍子木ぶりや夜の月　元悪
松向けぬるの追はく夜の月　一陽
秋出る舟の降む花夜の月　乙貴
森近に枕さらりや夜の月　文和
二三尺軒に継るや夜の月　田草
井に落る萩の末や夜の月　桂程
篠むらの法子まへ行や夜の月　松秀
夜の月出かけりと収耕ひ花　丁出
漂ひうり流るとも浮り夜の月　古挙
まゑの川て何ぞり夜の月　松月
人声の上に出てはり夜の月　布席

髭摺よ天乳啼く夜の月　蒼九
筏しより上に出すまじ夜の月　桂積
夜のうく菴をも蝶くもあまた花　桂海
夜の月出菜延の白かな　田菊
情ある物のけや夜のうく　塚谷
其の月蝶田へくと皆宿　貞雅
夜の月に詠みな流れり　不村
人喚む川原の茶や夜のうく　古翠
尺とやみ人もや寝や夜の花　月晩
押流し子人かきや夜の月　山雅
つ掃て鐸き呼や夜の月　風毛

夜

帷子
辻ヶ花
夏羽織

川舟に来ても替らぬ夏の月　京坂　一甫
城東の大橋の出来や夏の月　柳塢
走り所に人の出てく夏の月　芳谷
朴の葉を茶とものまれて夏の月　武蔵　太瓢
帷子に気をも任くる五月人哉　二丘
かくれ紅や借着の形も面白し　松秀
帷子に乳房よくみる洗ひ姿　耕雪女
六條や白乳ちりくて辻ヶ花　為子女
海人の子は育上手よ辻ヶ花　杜年
ちら条彩の方ふつとも夏羽折　楳海
兎角二つ合て挽や夏羽織　湖平

草物
競駈
百艸摘
菖蒲

続きて端しくて重や夏羽織　芝葉
乞きき名の行くる小紋や夏羽織　節之
夏羽折撰みに大きな舟出けり　布摩
葉羽織花香つけの梅ハ香　山笑
手をかけて脱てぬけけり夏羽織　不曲
口惜しくも着物ほり夏羽織　松竹
老松若乳松の緑や芽毛の　二丘
売るや明るきもりよ競駈　以吉
百艸の千鳥に浮世遠けれ　謝堂
移花の軒にさしける菖蒲哉　呂丸
菖蒲ふして明集くる家内哉　五董

旅人の衣に急くや菖蒲時　素三
あやめ葺手に萩の寺あり　花荷
新宅の軒も床しき菖蒲哉　素来
葺やもし人は葺するあやめ哉　玄々
一株刈手篤遠にあやめ哉　大梅
葺くるとつもりて通る菖蒲哉　一皇
曳るゝのあやめ葺りて北残る　寸丸
挿出して置るゝや菖蒲と池の跡　子粒
刈残しておも白にあやめ哉　謝堂
見おろすや軒の菖蒲を棟がき　仝
世にかゝしてあやめ葺ふや通りけり　和興

葉名秋ふかゝぬ物うやや菖蒲哉　紫笑
見後しや月の宿も菖蒲かな　花太
葺きとの絵来て実にあやめ哉　為安
あやしき風もあやめ哉　陶桐
様もの出張ておもあやめ哉　惟孝
菖ゝし風や菖蒲の表かな　志山
朝軒に常にけるあやめ哉　翁山
座軒の菖蒲ぬるゝ菖蒲哉　月暁
むらさきちらし見えし菖蒲哉　仝
菖蒲ふくや軒に静かなる町　涼谷
葺てゝかゝりてみるあやめ哉　芙月

菖蒲湯
花菖蒲
田植

軒菖蒲ふくも宿屋の錺かな　一之
菖蒲湯や在舎の僧も入て寄　吟雀
猫宗や房尾の上の花菖蒲　五峴
箱根ふやるも白くぞ咲ぬ如　瓢雨
夏秋をも待る此付る田植笠　雅柳
大寺も月の来まて田植かな　戴星
米五升借てゆきの田植かな　随好
商人に物訛るる田うゑ哉　一甫
名彼
田を植て風の名日し鏡かな　寄笠
借る代り苗無て来田植かな　田華
兄弟を海して来す田植かな　大梅

此家蚕や田植の跡て先掃り　一具
秋ゆえて彼槌任藁ふ田植かな　仝
一夕ちる田植に出くり江戸の舞　松逕
思ふとも雨田を植付し月秋や　落之舍
隣付ひ人の三丈田ゟ急ぎ於　其船
引違て印して戻る田植かな　丁古
此ものに扇も出でて田植かな　里角
田一枚植て帰るよ保ちかな　作人
夜旅よ家も一つ見る田植かな　如仙
君が代の松や田植の並上り　万里
翁りこね月の出まて田植かな　梅海

早苗

植る手に葉とる子の揃る山田かな　不猶

見るうちに木陰へ入る田植かな　桂草

笠綱に娘と見ゆる田植かな　源谷

雨の来て植ゆるなんや田植唄　二丘

植ゑしは田も太夫に武蔵かな　秋臺

代かきの雨の着や田うち明　素志

安産を田植の手へ告る也　節之

祭る植る田の跡第する祝ひかな　耕雪

松にとて迷惑なるや田植笠　信力

雨中の衣うけて行田植かな　萬之

余所の田へ投てをこしけり早苗かな　芳月

苗配

雨ふる荒井桁の早苗かな　南よ女

苗取

苗の世話も兼て内苗の苗取り　星谷

二人苗とりて帰る庵や早苗哉　少山

二三人桂えふりて早苗とり　以蕪

早乙女

苗をすに交へる休む社かな　横海

早乙女や松原の笠木の流れし　風毛

早乙女は中より月の大に並ぶかな　栗笑

早乙女の飯持て稼る和尚かな　乙貞

早乙女は茎飯時を壬生の鐘　葉月

藻花

藻の花の咲くとて見れ明けり　南よ女

萍

萍や舟の行手の月の前　両査

菱花
川骨
紅花
紫陽花

涼しさを呼集めたり菱の花　山雄
川骨や岸に行くる鷭の脚　蔵和
川骨の花さきよけ来る鴨かな　稲前
川骨を流の声するや雨の中　田柔
川骨や石橋の流れ渡り　松秀
足もとへ[illegible]紅の花　二丘
名所や小様る[illegible]紅の花　涼右
紫陽花や家のまはり[illegible]　来逆
紫陽花や真白に[illegible]　杜秀
あちらこちや山の[illegible]に気付て　二序之
手持し紫陽花[illegible]の上　千松

百合

紫陽花や二度まで移る[illegible]　不流
水もはりや秋に似て似ぬ[illegible]　易年
気の付て紫陽花色[illegible]　石府
紫陽花や[illegible]の[illegible]の[illegible]　蔦荘
押並て紫陽花[illegible]　八朶
芽くの[illegible]百合の花　半井
山百合や[illegible]の[illegible]　飛得
出候[illegible]百合の[illegible]　素古
探先や[illegible]の這入し百合の花　涼右
百合の花[illegible]　芝葉
伯屋のつき[illegible]の花　桐雨

苔花

手の届く所の外や苔の花　田蕪

花の??や縁のかりて生上りけり　月呪

苔の花柄杓の水を捨てぬ也　名於

??には宝前の鏡や苔の花　甫月

?や咲苔力れの苔香薫　文㳒

??の?り?ゝ??や苔の花　布席

夏菊

夏菊の??ゝ八??のぬ旭かな　一竹

??とや夏菊??逢ハ山の阿　桃嶋

夏??や??の???かな　松井

夏菊や??ゝ??運ひ雲　青池

???ハ??て新?の夏の菊　幻芝

石菖

酸漿

金銀花

合歡花

石菖?月のかゝるや池の中　キ山

????????やなるの庭　鴨湖

金銀花?????や雑も?ぬ処　双二

??ゝ?????山や合歓の花　一之

??や????物好き　菊女

??の?二尺の体?????　謝堂

????白の縄?や合歓の花　栗笑

??か??かまれや??の花　凉谷

???????男や合歓の花　守鳥

??の??花??の合歓の花　大梅

合歓の花??の??????　棠郁

栗花

京山くつかへしまぬよう人ゆかの花　椅丁
岩欽咲や旅まこ娼の白峰　文僊
子等の乃子ふさけるや栗の花　素白
とりしく子囲炉裏の志乃文栗の花　正令
植うるハ好イ米なり栗の花　史子
あまこ流るる峠や人の花　南よ女
色角して寺の傍え名々乳花　菁谷
第同の毒ぬ戸白や栗の花　仝
懐出て凡の上なり栗の事　芦月
栗の花散るよりて西ハ支　二晶
庭のぞる青鞘して里の花　鷲棠

橘花　柿花
杤花　椎花
青梅

五月雨の住居やも橘　かさ雄
帆降て一ツ岸の宿柿の花　松秀
柿の花二ツ家隔る古駅ゆかる　泉耕
蛙にも其程しや柿の花　雄積
凡るよ叢物ハ云ふ家柿の花　葉月笑
命るもて傍ふ香り柿の花　麻交
杤咲や宮市あけて河の宿　かさ雄
香露の天気晴や椎の花　南よ女
句ひより叢子耕しや椎の花　以吉
青梅やよ文兄嫁し此家宴　其形
青梅や内出ひ程ももつ人　白超

安

凡花

若竹

鶯飛去て静かになりけり風の花　古梳

風の花八ツ当る迄の月散ハ　里竹

白梅や風に拂はれて却て咲　麻交

若竹に庭一ぱいの月影も　應雨

わか竹にさし込むや神楽堂　祖竹

よしあし居を若竹の影形の　文洲

若竹の寿ゞや古竹の葉数多き　鶯毛

わか竹の揺れしもけうやさし哉　耕安

若竹の物遠し竹陰の影　有一

若竹の揺よりさし入る月影　篠流

わか竹や一面なる風の光　文廣

今年竹

若竹や若葉も霧の一ツなる　竹さ雄

わか竹や小松〱の山留り　麻交

世の縁や今年出来る竹二本　芦帆

芽若竹切ても土手より今年竹　友之

古竹や子孫に伸びる今年竹　梅雪

小雨ふると光ありし月影や今年竹　文和

憎〱よ声かけもなく今年竹　角よ女

聖二夜の堤の中や今年竹　子梅

一露入りけるハ露持たし竹　葦母

葉茂る窓の堤や今年竹　其之

初蝉

初蝉や松の隙のとまり内　寿堂

蝉

初蝉や格子に隠して宮しけり　鶯笠

蝉なくや雑も鉢の母舞処　稲翁

蝉なくや昼主なれば枯枝　仝

鈴懸の簾引し蝉の声　芳谷

嗄しても聞きし蝉の色　梅好

蝉啼やおいりと遁庫裡の棟　青峰

此頃を蝉も鳴かぬ来　雲々

通天の葉の上や蝉の声　蔦之

蝉なくや瀬の釜の底　仝

雀子のかしやるなしと声　陸奥 九畦

蝉なくや麦白き町の中　古梳

森冷し種樹下や蝉の声　鷺巣

峰蝉の白露流し　双二

手摺の子も蝉の声　棠郷

蝉なくや傾くも出る　二至女

来るへて来し蝉の声　松井

蝉なくや文字着　松秀

雨香の時の蝉の声　華母

せめてもよく栽し自生徒　仝

蝉なくや鶯帰る一里塚　笑語

と蝉肩折の上　揚山

蝉なくや葉の出て　雀堂

蝉時雨

鹿子

蝉の鳴中から出るや氷室守　乙貞

井戸掘の昼飯時や蝉の声　松照

昼飯の尻覚えするや蝉の声　正令

蝉なくや雲を枝より伝ふ声　汝南

二階から見下す所や蝉の声　津も

ふりかへし寸の機やせみの恋　八朶

松茸に鳴てるも蝉の時雨かな　五晩

狩人の後追けり鹿の子哉　一秀

鞠ありし白さの尽ぬ鹿の子かな　夕山

旅人のよけて通るも鹿の恋　鹿雨

また人に馴れて餅くふ鹿の子哉　棲鳩

奈良の木間に鳴く鹿の子哉　五雲

雨の鹿の子まぎれ出てひとつにぎはひ　芦航

当年の子を覚てさまよふる鹿の子哉　一甫

研ぎ仰ぐ芦飛び越る鹿の子哉　田革

人声を力に来る鹿の子哉　仝

湖や井飛びて出て来る鹿の子哉　秀茅

またや親の何処へ出るかのこ鹿　椎嶺

此頃に後から来る子鹿哉　告示美

時雨の中に出てくる鹿の子哉　陶洞

喰物もなく出る鹿の子哉　月悦

唐紙に見かへし鹿の子哉　涼石

羽抜鳥

翡翠

水雞

抜もせず抜ずもあるか羽ぬけかな　文洲

嘉兵衛が煮の子孔這入る羽ぬけ鳥　札月

明の露に濡るゝ鷹の羽ぬけ　芦月

万日参り田ゑるさうり羽ぬけ鳥　守鳥

温泉の山へ飛んでも羽抜鳥　承静

山へ降雨さらさら居るや羽抜鳥　驚蕉

翡翠や涼しく高き八重の門　杏桟

翡翠鳴くや江戸を離るゝ二里　楳海

尾もなきて水雞の声に何処の秋　古川

一あくしてなく社しら水や鳴く水雞　蒼雉

山すゝく水雞の聲する雨夜哉　一陽

水の月うごくは水雞の声　素芯

何処やらて水鶏鳴き之月の中　田菜

一声は君は根朋る水雞哉　守倡

扉寄て雨穂の水の音かな　米莚

水高く行の文字水鶏かな　大貴

扉まで世界に遠く水鶏かな　文洲

水鶏鳴く夜や旅近き燭の雨　里月

根ありて葉を葉る母や水鶏　芳谷

夕月や藪根の水雞　艸可

農を経て何処の月夜の神の水雞　市席

明日を待夜の慕ひは鳴く水雞　貞雄

鳰浮巣

照射

火串

鵜飼

五月雨や傘の先ゟ稗も蒔し　十雅

井戸尻の稲の五株を鵜のくゞり　与人

又青き雨と出るは鳰の巣　南与女

五月柳く啼をすゝ鵜は鳰の巣　如仙

元溜く蘆へ這入し鳰の巣　幻芝

鵜の笋も蘆の根際の浮巣哉　玉葉

照るやと声の外を隠る照射哉　一具

通りゟ過て夜を來し火串哉　松秀

雨の来ぬ夜の宿近き火串哉　杜貫

打縄を隠さるゝも雨夜の火串哉　寿美

鷹の子の飼に捨し鵜も隠し　桂裡

青嵐

静さやおもくゆる鵜の篝　芳谷

燃さしも淋し鵜のかゝり　其笑

起しては見る鵜に抱く鵜川哉　四明

神の松をも上ゟ出る鵜飼哉　仝

小舟や鵜飼の家の這入口　万里

探仕舞鵜縄に月の雫哉　谷村

まかせ藪と知し[illegible]尾の礼　去来

本道は菖蒲に童しまかせし　鶯子

川もけさ脛くゞりや[illegible]　古琴

本多川や舟のかゝりしまかせ　巣平

山の際で曲るや海のまかせし　康谷

青すだれ

紫の裾こそゆかし青すだれ　篠山

青すたしや家にあまる納戸口　芳兄

青すたしの影まで涼し夜行かな　松秀

簾

簾垂の落てかりし舎かれ　初雄

簾垂や気味よく透し雨の後　和琴

夏之部下

六月

六月や柳もならしはる竹の寄　森交

六月の雨乾中之宮上川　一具

六月や形くずれて夢の寄道　每与女

六月や崩れて揺し蝶の宿　荷堂

六月の梢涼しく吹れけれ　鼎湖

水無月

水無月や家毎よ香る庭の松　名倭　一甫

水無月も蔵の上の夕月の香　多倖之

氷室

寒くるも空良日時よく氷室かな　素芯

暑

女童の水宮ゝえて血流さぬ　久蔵

山くの暑さ簾に仕切かな　一瓜

暁よりも夜の帷杣の暑さかな　芝葉

日よ戸を出ても暑さ暑さかな　竹葉

暑さかや屋根の様の少しよふ　二丘

前丈と云ふ家もする暑さかな　吟庭

嵐の音孔きゝと家つる付さ哉　素来

暑さ稚き其ゝの暑一つかな　箒笠

云ふくと見え戯るの暑さかれ　田蕪

暑さかや去らく光る尾幡　仝

戸を横にたてゝ稲居屋の暑さかな　古秋

今日も手紫陽花の往来暑さ遊し　松秀

人為の成る夕の暑さかな　五竹

暑さも冬や西成八女の名古なりき　角上女

精蒔よもよふく涼し屋根棟　一貝

池の子笛形淋しき暑さ百　季静

暑の暑孔つる折ゝて暑さかれ　氣坡　一甫

暑さ冷えのてゝ夏さり見え打涼え　大笪

暑さかや山の麓へ下る谷が里　大梅

暑さかや此の暑の待ちかね夏　蘆半

田の色を見斗ゑく暑さかな　玄心女

物申と云ふ下暮れあつさかな　松秀

土用

山吹の実を持添て黒ミけり　石蒋

一里程先に松ある暑の角　進游

山ちる此味噌の口切る土用哉　久山

備へらる帯に土用哉　行左

刀屋と近付になる土用哉　芳帆

松の木の傍に添ふて土用過　友之

素麺の骨抜にけり土用哉　四箕

犬蓼の雨晴に折る土用哉　峡々雪

飛石に意足も傍める土用干　二丘

須弥も女客有る土用干　素芯

俳の借庵持ちや土用干　禾木

土用干

虫干

血の津ぬ矢の松も出さるゝ土用干　松秀

参る程に四つに四つぬ土用干　為よ女

衣傍を以ふや備も此土用仮し　谷従

土用しや條の花迄来る座敷　松月

虫干や菊の香へ通る目形香　桂涅

虫干や一反布をかけて仕舞　松秀

虫干も上座にならぬ書籍哉　第級　一甫

祇園會

帝ふかるて八重と立交祇園哉　雅柳

鉾

月鉾の気くれて来や嵐山　松秀

木々もゆるぎぬ鉾や曲り角　仝

不二詣

大切に杖を持るゝ不二詣　生雨美

夕立

西月の夜の雑星や不二詣　一具

白雲の中に声あり不二詣　秀策

富士詣今津をへ子諸連し　雁嶺

人皆も世に業や不二詣　月晄

夕立や折ふし悲し大松種　雅柳

夕立や男の中の母義し　桂翁女

ゆふたちに走る鳥も家の月　文和

夕立や舟の中行くもの音　萬々

夕立や肩に余れる積過し　田葉

夕立や山隠朧せし時雨めく　桂経

夕立や出初る比の雲の形　多与女

夕立や墓一所の時月通り　松委

ゆふたちや様の流れ椎の下　瓶乙

白雨の降て来にし和尚哉　猫平

夕立や夕立にしたる青立る青　吟霧

夕立や縁に涼みる巫子が料　涼岱

夕立に先ツ通る来る小舟哉　文僊

雨もらし替へし帰る夕立哉　淺甫

夕立や施術の衣よりの青葉　多与女

夕立や藪の下の提笠　仝

竹鳴や夕立の乃の声か紅　淵平

夕立や鶏上る臼の上　禾木

雨乞
雲峯

何処やらに夕立のして風の来　月峴
夕立の晴てゝ来る速ひ哉　仝
六條や夕立るゝの人通り　涼石
夕立や山やりとうふ負の丈　久蔵
夕くれにふりこめられし橋の袂　稲秀
雨乞や濡てゝ立る衣の袖　八朶
雨乞や濡る気て成る男の子　芝葉
雨乞や雲にまちかける鐘の物　素竹
雨乞や雲まもわかん空の光　茂之
行様の匂ひ出し金雲の峰　芦帆
樹子の雲て崩れも又雲の峰　季游

天龍を祇て何らん雲の峯　峡洋
瀧壷よ形しく古鞍や雲の峰　竹葉
峰深く雲や旅僧の病占　一具
所屋橋の雲が生茂る之雲の峰　仝
境縁まて揺布行之雲の峰　桂海
突淀て揺の渚や雲の峰　高よ女
外立る竹の匂ひや雲の峰　笑話
立雲に似たるほなし雲の峰　白桂
油絞の縄絆や雲の峰　松秀
商人の近道形や雲の峰　木探

扇
扇持笑て席つる入遠穴了　月下

夜る舟渡へまゐれ扇の角　蒼岩
黄昏さ子舟の落花く扇哉　支之
影のや明星停に扇店　正令
来ぬ人ゝ宝中継に扇の手　一甫
笑倣
扇窓子舟ならむや花川戸　素光
代様の白絣に扇の肌　節之
様の香子露みる扇の扇　貝岩
扇出て何之影り不二の雪　玖久雪
内侍子匠座下あるかな哉　松白丸
作りかさ蒼扇哉　布序
去り見よ扇手染めの影　二立

度

團扇

悟りぬる人の苦に扇の稀　全
構ふて手に浮く扇の孔　羽人
山とけ右や扇を投て像の上　夢雨
子ろ君の人の外に扇の手　青よ女
白雲の浮く無人地の扇哉　不曲
かき流し川の月投く扇哉　松雫
雑の舞を投し扇表州の上　八水
様桜の手籠み縁に眠けき哉　松秀
後團扇を移て来り保岩　四藤
雨の雲子下戸の?團扇哉　半丈
世く書きて吐く團扇哉　青よ女

汀

汀拭

耕香

益稼

露[illegible]関扉かな　松秀

月のある堅田に[illegible]かな　不府

松の[illegible]かな　幸雄

梅[illegible]関扉かな　二丘

薄霞する人[illegible]かな　松海

甲斐

手拭の[illegible]関扉かな　松外

鼻紙[illegible]汀[illegible]かな　二丘

一夕[illegible]　雁臺

堅田[illegible]汀拭ひ　雨黄

[illegible]上[illegible]　多よ女

汐の[illegible]薄霞かな　古琉

清水

飛[illegible]梅[illegible]かな　多よ女

[illegible]　采鶴

[illegible]の[illegible]　易年

[illegible]の[illegible]かな　五峴

[illegible]　鶯笠

[illegible]の[illegible]かな　孔正

[illegible]の[illegible]かな　多よ女

[illegible]の[illegible]　若帆

[illegible]の[illegible]の[illegible]かな　五峴

[illegible]かな　蜀綉

[illegible]の[illegible]かな　文康

豆腐屋の柳のしたに清水かな　西樵
鮎貸ほの前に借りて山清水　岸河
茅針て深山清水の流れけり　九畦
振捨るもの旅人の清水かな　李買
柏屋て降る人に寄る清水かな　桐雨
雲の峯の分かるる辺の清水哉　荷月
一本の柳名もなき清水かな　雅松
夜や来て枕手に掬る清水かな　杏庵
一里の茶屋に結ひたる柳　雄嶺
茶屋の庭に月の昇る清水かな　阿芳
忘れぬや清水の露し人の氣　松海

歩水

茅外の小屋に涼しげな清水かな　吟鹿
松風も結びついて山清水　戴星
人声も絶えて雲も清水の流れ　古琢
結んでも雲も掬ひて清水かな　量山
鶯の並んで結ぶ清水かな　乙堯
水しみ清水の底まで山田かな　民株
結ぶ手に松影移す清水かな　蕉雨
行く人も歩みを急ぐ辻清水　鉄巣
行く人や掬ふて涼し夢の跡　手籾
行く人や結んで落ちゆく友の雫　雄嶺
人住みて寂しく来る清水や風薫　茶静

風薫

竹婦人
簟
凉

今薫日の出かゝる隙や夜　一蓑
皆の寐を紙鏡のえて葉かな　秋和
神の手の私をすり捨るも竹婦人　芳兄
皆の団を押て団扇や簟　田筆
不二山を家にての島や簟　月峴
涼しさや物見も隠す蚊帳の宿　若筱 一甫
涼しさや又向ふ隣に星の影　尚古
又要利壽涼しさよ坂の月　素芯
ぬり畳にて涼し角田川　大梅
行燈のともしくにある山家かな　雲山
涼しさを残して近江　槿海

涼しさや古寺見附て人の寄る　ちゝやめ
すゞしさや小一里先の竹生島　一蓑
涼しさや次第に暮て松の月　千之
涼しさや行燈並ぶ葛籠かな　狎菜
朝月を見ても涼しや暮の丈　仝
涼しさや経机を...て机の香　芳序
涼しさや波の手拭燈の上　桐宜
涼しさや木に寄てゐる細工箱　九峴
涼しさに足を向けて涼しき流かな　月下
涼しさや細き木来る彼仗　若筱 一甫
すゞしさや枕稜栄山秋かな　雨考

納涼

涼しさの雫や峰の月　布席

すゞしさや宝蔵の望楼の上　志女

すゞしさを見るや笠の木の間口　嵩山

涼しさや梅子の木蔭かな春　春水女

舟涼し柳に月の出んとして　素白

涼風の頭は吹くや蚊帳の堂　充聖

すゞ風の行河の岸の竹すだれ　芸所美

涼しさや星の流るゝ田の上　守弘

すゞしさや梅寺近き夜の声　桐園

笛の音に神も抱いてすゞみ船　木公

桂 [illegible] 納涼かな　一ノ津之

飯くふてさて引や涼ヶ場　全

来る人の相手に涼し夕ヶ丸　蕉笠

[illegible] 納涼かな　四柔

[illegible] 夕すゞみ　留よ女

[illegible] すゞみ哉　一定

桐の葉子雪落ちて [illegible] 涼し　一揆

[illegible] 涼しかれ　里月

[illegible] 人待つすゞみ哉　継堂

海人の [illegible] 涼み哉　斗米

舟並べ二つ [illegible] すゞみかな　壮貫

[illegible] 涼しさ [illegible]　政喜女

氷賣

川端へ持て出るやすゞしさ　粗手
旅枕ところの氷のみ舟　去蛮
夕涼猫さへ清し夜の庭　栗笑
万遠へ人の氷を呑すゞしさ　二晶
叱ても四方へ引あはれすゞしさ　鄙菜
夜物見の挑灯消るすゞしさ　以交
夜の月毛さえ清し夜まゝ氷　双二
足止て法を通ればや涼しさ　右家
川端へ詠任の通ふ凉しさ哉　秀子
つすみ玉葉春聚をあはれ　松秀
秋暮春のまゝや不二清し　陶潤

暑水
心太

暑さよ一雲の羽織脱せよく　陸奥 杜貫
様かまへ命に戻しても心太　南山
楼くものり氷やとる涼しさ　二紅
旅人も来てみる晩や心太　蔦之
世の留守にから心ふる角力哉　月咒
松風の手先に来や心太　竹里
手揃へして進まや心太　粗手
市中の富みは濡れや心太　永嵩
旅人の茶椀ともや心太　有月
突出して物をもつれ心太　乃草

一夜酒

持人もみて数奇し一杯酒　不曲

水飯 冷麦 冷汁 水粉 梅漬 鮓

蓮葉の神於為免一夜所　永孚

手枕の甲斐はなく尽し一夜風　陶烟

催馬楽の手本て藤や一夜酒　花甲

水飯や飯はなし出る子呂一人　守喬

冷麦や葛信家中の大手先　亀女

冷汁す背戸の山新福人香　粟笑

水の粉のうらうら晴し旅衣　有水

梅漬や一切有死梅の尺　乃黄

松松子夕せ二度見へ柱付し　松峯

鮓るかも飛句子きゝふや桂秋　亀女

鮓鮓上夜明行の端る旅ろ　雛周

艸いきれ

夢の蓑の剣子遣し草いきれ　伯丈

青田

飛しうか家ゆる志かの青田哉　貞雄

舟人はとまれ兮死青田の神　桂葛女

藻もあり乾坤のうえて青田哉　丁我

薹返て見渡る風行る青田哉　休園

一牧ぢ千鶴の白ふ青田哉　政勇女

蓮う緑青田の中の桜かれ　布摩

桂上て縁実の雨ある青田哉　梅鳴

飛の背の青田に隠る戸口かな　瑞山

かくれ色よのまのり青田哉　白起

田草取

田草先偏て掃出ん原の糸　惟州

蓮花

柄の末まで月にゆれて茎の中　素白

蓮池や増る流の這入しきるの川　甘谷

浴る月に涼葉の香まで狂の蓮　虎陸　甫山

今は芝狩るに渡る葉見らん　無弍

以き蛇よむ時計の音や蓮の花　節之

まき浴や楼橋の欄干の十分一　仝

貸し浴衣半して葉見茎さ花　月屺

蓮さくや尾の船まで忘れ　仝

擂る之子来る迄や来んの中　南安

庭淋し植浴り今宵蓮の花　一具

走る葉や鳥羊まで来る白の中　仝

沢浮

近景の歟りさえん全蓮の香　杜年

秋の名も知らぬ小池や葉の色　稲香

二つ三つ上るもとは先や蓮の香　古陸

台蓮花咲きみ静かぬ折りしは　佗夫

浮れぬ新発人や蓮の中　希席

鉢一株して秋を来ぬ泉の葉見れ　ぬ蓮

葉荒の無下子へ入りきんの香　桂業

座く八く同出水より包蓮見舟　雨苛

扇まて濡して見ずり月の蓮　幻芝

沢浮や苗代にと花寄せつ　一具

沢浮や田まま寄らぬ香嵩　雑囲

夕顔

夕㒵やゆふ当て抑く罹様　守雪

夕顔の中に寝て居る小家かな　応雨

ゆふかほや㒵を出したる家の窓　黄谷

夕㒵や烟揚なる蝸の家　萩水

据ふる床や苞の中より猫の㒵　東止

夕顔や手折て入る二日月　一捻

ゆふかほや咲る〻の芸に付す　角丈

夕㒵や痩痩届けて松茄　何年

ゆふかほや先すつ出る厩かな　粗年

夕㒵や下手の作する組屋敷　八重女

夕かほや今宵の為八戸棚の上　月𠃵

益良

夕㒵や作り出しける納尾　兎々

昼顔や飯くふ傍に山の雲　猟来

刈出して昼㒵咲ぬ畑の縁　不上

ひるかほや笠子かくして新屋敷　庚年

昼㒵や眺めて来し末寺の末　其兆

ひるかほや垣のくるる馬の面　二丘

ひる顔や人持合ん一里塚　陸奥　札月

昼㒵や挑て以て彼山の水　麻文

撫子

撫子や何処迄続の夕日かな　應西

撫子の花やふくり垣の蔭　無寸

撫子や草の葉草の葉草の露　布席

眼皮

葎

綿花

青芦

青芒

青鬼灯

瞿麦の雨にも折れし姫の手　桃鳩

加茂川も瀬々の名なき撫子　葛松

折らるゝ草か見や撫子　丈二

ひとへ〳〵と干上る草や眼皮咲　縫巣

羽前

蔵の裾草ともなら葎かな　播海

蓬生の花さく葎の月折々　鼎湖

住家も月や十宵の八重葎　赤齊

花よりも実の有る花綿の花　雅鎖

青芦や蝶の丹よ富歟　繪草

青芒夜もすがら物の行　長光

風ぞ青鬼灯にもぬれ　八朶

麻

櫻麻

帆

桃灯の消えて行くや麻の雨　萬草

桂川や麻の葉紙の暮るゝまで　量山

麻作りてさへ緩ふり舟上り　素石

面擇て延堂くれけり麻　棲海

帆小さく夏の空の火影かな　戸山

帆戸の声や帆も見ゆる宿の秋　一之

帆さてやともにさ隣も　青林

帆一つ続ふく行く折る薄　東止

若葉の雲に見ゆ薄や帆　若月

帆ちらくと蝦夷の料理の手様かな　友之

切て出る帆の萬気や出帆　二丘

松秀

茄子

結ふしく瓜の間を成小庭かな　角上女

茄子瓜などのちぎり忍ぶや別れ路　荷乙

瓜ニ寄價も増さて流し出　布摩

四つ子瓜流し寄る桶風呂か　松秀

瓜ひとつ二ツ匂ひぬ茶の庵　不曲

張裂て姉しき瓜の家へ入哉　慈巣

尻垂は植て継しき茄子かな　常陸 眉蕉

曲子上て見よ宝珠や初茄子　吟鹿

靡くくもなのこゑるや初茄子　応白

初茄子不二と告るる畠かれ　東樗

花火と指て唯や初茄子　其之

真桑瓜

初茄子畑譲て進じ仏の日　二丘

売らるる蔵茄子の切や真桑瓜　田菊

其後より言てあらはや真桑瓜　松秀

間引して嫁子は見るる真桑哉　仝

初真桑流の付ても一つ見ゆ　史了

凌霄

茗荷茸

紫蘘

百日紅

火取虫

凌霄や蛇縁低る古さ家　守烏

油断して筆子ありけり茗荷茸　枝海

紫蘘の香の[illegible]稀哉　手粉

古池は形[illegible]百日紅　壮貫

蚊帳月は世話して[illegible]　木公

投て[illegible]来ても[illegible]　鶯笠

毛虫　蜉蝣　川狩

草木ゝ露をし毛虫花さかせ — 禾木
三ッ葉もは三つ毛虫のかるさかな — 小園
葉ゆさぶり出す毛虫くさくかな — 田菓
秋しまで毛虫の手や芝さき — 竹里
宜しき花背中合する毛虫かな — 蛤菓
拳とる風にとまる毛虫かな — 古陸
木々まゝ花芝へ出る毛虫かな — 石狩
山姥の乳や咲けり蜉蝣かな — ちかめ女
陸奥へ来て三百の月蜉蝣かな — 一具
蜉蝣や蕪子連る寿禄かな — 月涜
川狩に出て行く旅人かな — 芦帆

沖鱠　御秡

川狩の浅ぐみ来たりける見 — 田菓
川霧や下船は陸に風の音 — 一具
川狩を五ッ三つの吼あり — 小園
川霧や松の頃より — 僖来
川霧の子網も立てかき分けて — 月児
沖鱠船頭の利く男かな — 英山
芦の気の茅の作り出すり沖鱠 — 蔚之
鱠皿心も涼し沖鱠 — 松秀
ちくちく松気も加へ沖鱠 — 月児
中くに経清や御秡川 — 一之
声女の名もなや祭りさるる御秡かな — 夕山

茅輪

襟元の紫移りける法被哉　素三
笠縫て法被持ちや旅の上　如水
よそ外の被きて雨る法被哉　随烟
偕しても佐の去りる法被哉　高丁女
蓑きて雅も慣るゝや法被川　田草
宗匠よ育ち濡しさすかに法被哉　有一
法被して形や梅来る宿まで　葛松
人先よ茅の輪潜るや孫連て　寿堂
秋の来るを待てぬ名古の御祓哉　芝叢
美しや茅の輪の上の天の川　大梅
乳呑子もくゞらせて茅の輪哉　高よ女

夜寒

大寺の朝る中より夜寒哉　湖月

妹隣

京山や秋来し隣よ雨の飲　斎楼
雁の来るも小さき青きや秋深　玄翠

秋近

秋近く人の声て立内西日哉　棋海

夜山

夜山の木傳せよ高る雨の声　坂久子
夜の海て寝ぬ中より流し声　枪拳

近よ世へ大寺のゝ持ち集の如　雁蛍
夜山や高よ峯の川豆腐哉　五明

夜野

明切て桃の畑の夜哉　坂久子
鉄炮の音も小さき集哉　如仙

夜海

出初の孔今蓑そる夜の海　椎嶺

夏題不知

終ばかり月見る夜と寐よかし　甫石

まくらとる夜の影ほど能田川　一葉

鶯や影さへ夕暮の夜ん　文游

人の為に伝ある夜の水すゞしさ　相宜

夜影や声なきの赤き里の雲　蓬亭

○

春花咲の折しも蛍や散　秀和

眼覚ては影も出て出てあらん哉　仝

蝶さへ出れ竹や日和のくらふ宿　越後　柯亭

夕立の晴て犬蘇や畑のもの　仝

墨染の塚まで見えぬ杜若　羽前　文器

あつしくれ日の露や妓子坊主　仝

外字の中にさしもよき蚊や　羽前　子績

修行者ふられて極ふかゝる哉　仝

山畑や雨まつてなし秋の声　幸二

赤い鳥夕日まつこはん扇かな　仝

またして町中凉る暑さかな　仝

性まてや眺るさ鍵気休　美峰

役人の扇さばきや川普請　仝

誉られて集まる橋や江の茶　来六

涼しさや月影もてく松の風　仝

貴しき人の恋まて子萬哉　石㟁

夕立のむら〳〵や鹿小路　柳亭
屋松葺や板より内もけふの汗　仝
またしけや網かけ風月のまゝ移る夏　仝
太秋出たり生家の上や五月雨　也雅
ちよつくと母を見まへん花手か　仝
何事も手伝ふ出る四柱かれ　仝
秋の色は中秋西の峰かくれん　葉二
またの手毎紗漬は雨の影かれ　仝
わらひ誉て家ん菴のきゝみかる　来六
蓮の露も香まて出る螢時　仝
まゝうると常飛出ん小庵哉　仝

麦

風の生や人の肩も柔そめり　柳亭
梅が香も末木花冊や女ちらしん　仝
草詠とる子継丈枝くしり　仝
川狩やとうり炊かゝ且那かゝ　仝
赤きや帯き心まとゝ出し　之美やゝ雅
大株や続きまてるうれしさ　仝
唸ひ赤子仰天きゝる粽かれ　仝
五月の二夜月よしや時雨　仝
備へきんや牡丹の雲はり　美峰
月はりも桃しまその法紀はま　素封
女まて踏き出山や夜木出　仝

俳諧十家類題句集 夏之部

水鼎に杉もとしやふ二の丸　照生

裏の戸を水盥其日や中夜生　吐秀

鵜匠ホか鳥呼かへるゆふしぐれ　氷狐

聖和學園 短大 第 2910 號 受入 昭和 30. 9. 5.